

かめのり大学院留学アジア奨学生

## 月次報告レポート

(2021年10月)

### ・勉学・研究の進捗状況

今月はスピーチレベルに関する先行研究を読み直し、博論における研究結果を考察する際に、参考になると思う。スピーチレベルに関しては、文末における「ですます」の使用を「丁寧体」と呼び、「ですます」の不使用の現象を「普通体」と命名している。会話参加者の関係や話題によって、「丁寧語」か「普通体」のどちらかを基本レベル（スタイル）として使用することが一般とされている。しかし、「丁寧語」から「普通体」へ、「普通体」から「丁寧体」への「シフト」が起きる可能性もある。扱っているデータの中で、「丁寧語」から「普通体」へシフトがあったため、シフトの機能を考察するべきである。三牧(2013)によると、「丁寧語」から「普通体」へシフトの機能には、心理的側面から見ると、親しみを表したり、相手の普通体の発話に合わせたりする機能があると指摘されている。言語的側面においては、独り言的発話、確認、質問、答え、中途終了発話として捉えることが可能だと述べられている。これらの機能を参考にし、自分の会話データをもう一度考察していきたいと思っている。

そして、お茶大日本語教育コース内に所属している「日本語文化学研究会」が10月23日にオンラインで開催された。今年度から私が事務局として担当しているため、今年度の研究会では、発表者応募や研究会の告知を出すことや、会費管理や、開催準備などの裏の仕事をしていた。研究会では、講演会、ポスター発表、口頭発表が行われた。事務局の仕事があったため、講演会しか参加できなかったが、大変興味深く聞かせてもらった。今回は日本語のテンス・アスペクトと実態把握についてだった。内容の中でもっとも面白かったのは、財布が落ちているイラストが見せられ、母語が異なる研究会参加者から意見があって、言語によって様々な言い方で表現されたところである。例えば、日本語なら「財布が落ちている」または「財布だ」と表現する。中国語から直訳すると、「財布が落ちた」と言う。日本語・中国語の表現から、言語によって実態把握の観点が異なる。日本語では結果の状態と続いていると捉えられるが、中国語では「落ちる」ことが完了したというように把握されたと考えられる。また、タイ語の場合は「誰か財布を落とした」と表現することから、タイ語では「誰がする」という主語に重点を置き、実態を客観的に把握するのではないかと考えられる。

### ・生活について

東京美術館で開催中の『ゴッホ展—響きあう魂 ヘレーネとフィンセント』を観に行ってきた。今回の展示会では、ゴッホの作品や他の印象派の作品が展示されている。その中でゴッホの名作品の「糸杉と星の見える道」と「レストランの内部」は非常に美しく、印象に残っている。



参考文献：三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版。